

稲荷講 稲荷信仰

稲荷様とは山城の国、伏見の稲荷山に鎮座する、五穀主宰の神であり、その祭神は、宇賀魂(ウガノミタマ)であるという。人々はこれを勧請して、神社を建立し祀った。俗においなり様と言った。

狐は俗信から、稲荷の神の使いとして、おいなりさまは、狐の俗称となり、杜の両側に位し今日に至った。鯨井の屋敷鎮守の多くは、稲荷神社であり、薬師堂の南の一角に有泉の下組共有の稲荷杜があり、その祭りの日は、二の午の日であるという。

二月の月は、走って去るといい、又、二月の空財布といって人の心にも何となく、穴のあいたような、走り月であった。この2月の午の日は、百姓の一番頼りにしている、稲荷様のお祭りの日である。農民が画くお稲荷様の信仰とは、読んで字の如く、稲の荷(量)が一束でも多くとれることをお願いする神であった。

ここで鯨井民衆の辿った、信仰のありのままを追ってみよう。

元禄の昔から、昭和初期まで、人々は何等の疑いももたずに、農事と信仰は一つのものでと伝承を固く守り通してきた。私は鯨井の当時の民衆が、生きる苦しさを信仰によって支え又明日を生きる手段を、信仰によって力づけようと、いかに必死の努力をして来たかを、身にしみて考えるのである。

厄除け、お祓い、百度参り、そして自宅でお医者様に、数回脈を見てもらった、昔のオジサンオバアサンは、「俺も寿命だよ」と淋しく笑って、土に帰る姿が人間本来の自然ではないかと思ったりした。こうして、昭和の御代になり、鯨井の純真な農民兵も、第二次世界大戦の主力となって、突っ込んでいった。しかし鯨井からも何十名もの戦死者を出し、一番信仰の厚かった戦死者の母をして、これじゃ神も仏もないと、今更乍ら、唯の人間に帰って悲しむ姿もわすれられず、これも鯨井史の一コマと思うのである。

鯨井民衆の辿った信仰の道はどうであろうとも、稲荷信仰だけは現在、鯨井農民の子孫にだけは、生きている事を、記しておきたい。現在世の中がどう変わっていても、鯨井の百姓は、有泉下組共有の稲荷杜に手を加え、近年祭りも盛大にやるようになり、かく申す私も昭和55年、100年来の稲荷神社を改築して、今は孫にも事あるごとに、せっせと屋敷稲荷に参拝を進めている。

現在は鯨井祭典が稲荷様を管理しています。



以上鯨井史より抜粋 昭和58年3月31日 発行